

敦賀の常宮神社の拝所・中門の建築調査報告

多米 淑人*・吉田 純一*

The Historical Buildings of Jyogu Shrin in Tsuruga City

Yoshihito TAME , Junichi YOSHIDA

This paper is a report of the building investigation about Haisyo and the Chumon Gate of Jyogu Shrine in Tsuruga-city, Fukui Pref. The Haisyo was removed the gate of Kehi-Shrine at 17th year of Syowa and reconstructed it for Haisyo building next year. The Haisyo of Jyogu Shrine is the lager than the other Haisyo of the other Shrine in the Wakasa-district. And its architectural quality is higher. The Chumon gate is the called Mukaikaramon style. We consider that this gate was built at the middle of Edo period.

1. 常宮神社の概要

常宮神社の創建は不詳であるが、大宝3年(703)勅命によって社殿が修造されたと伝わる。古くは常宮大権現と称し、気比神宮の境外摂社として崇敬を集めてきた。明治9年5月県社常宮神社となり、気比神宮から独立。風光明媚な敦賀湾沿いに社叢を構える社地は4,455坪に及び、境内には県文化財指定の本殿のほか、拝所・中門・拝殿などの主要社殿、そして西殿宮、東殿宮をはじめ数多くの摂社や末社が鎮座している(図1)。

三間社流造・銅板葺の本殿は、棟札により正徳3年(1713)の建立が明らかで、昭和57年に県文化財指定を受けている。また、慶長2年(1597)に敦賀城主大谷刑部吉継が奉納したと伝わる国宝「朝鮮鐘」も所蔵されている。

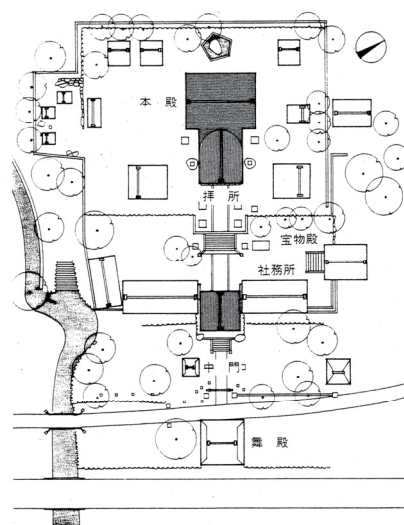


図1 配置図
(『近世社寺建築調査報告書』掲載)

2. 常宮神社拝所

(1) 建築形式

当社の拝所は正面1間(約3.33m)、側面2間(約3.34m)、唐破風屋根・銅板葺で、周囲は壁や建具などを設けず、四方吹き放しの建物である(写真1)。梁行方向は正面と背面に虹梁風の頭貫を通し、この上に台輪を回す。さらに、拳鼻付きの平三斗を2組並べて上方の虹梁を受け、その上に笄形付きの大瓶束をたてて化粧の地棟を受ける。中央の柱筋は下方が後平の冠木になり、中備は墓股とする。一方、

* 建設工学科建築学専攻

側面の桁行方向は、腰長押を回し、前後の柱間は頭貫下の内法に松や鶴（鷺？）の薄彫り彫刻を施す。そして、頭貫上の台輪に墓股のせ、これが桁を支えている。柱上の組物は出三斗である。柱外につく頭貫の木鼻は前方が猿の丸彫彫刻で、内側には頭貫を支える獅子頭の彫刻がはめ込まれている。背面の頭貫木鼻は標準的な線形であるが、動物の眼が彫り込まれ、一見彫刻風にみえる。天井は、前方1間が化粧垂木をそのままみせ、後方1間が格天井である。なお、柱の脚部と頭部に金具が巻かれ、桁の木口や破風にも飾り金具が施されていて、これらが木部の褐色を一層際立たせ、荘厳な色調を漂わせている。



写真1 拝所

（2）若狭地方の拝所建築との比較

①細部形式の比較

若狭地方の主要な神社にみられる拝所は、唐破風屋根あるいは入母屋屋根の銅板葺で、方1間、四方吹き放しにするのが一般的である。そして、屋根形式と細部形式には関連性がみられ、唐破風屋根の拝所が最も装飾的である。

若狭地方には常宮神社の拝所と同じ唐破風屋根の拝所が29例みられ、これらを比較すると、葺材や四方を吹き放しとすることだけでなく、頭貫を虹梁風にすることや組物が出三斗であること、妻飾が虹梁大瓶束であることなど多くの共通点がみられる。また、台輪を回す例や木鼻を側面のみの猿の丸彫とする例などは、若狭地方でもそれぞれ1例ずつであるがみられる。しかし、中備が詰組である例や腰長押が回っている例は若狭地方ではみられず、相違している。

②規模による比較

前述のように、常宮神社の拝所は奥行2間である。これは若狭の一般的な拝所とは異なるが、若狭地方にも1間×2間の例は5例みられる(表1)。これらと常宮神社の拝所を比較すると、銅板葺で、四方吹き放しであることはやはり共通している。しかし、天井が前方1間と後方1間で違うことや先と同様に腰長押を回すことに相違がみられる。

これは後述のように、この建物が元は気比神宮の中門を移築したものであることに拠ると考えられる。以上のことから、常宮神社の拝所は若狭地方の拝所と比べると中備が詰組であることや腰長押を回すことなどの相違がみられるものの、それ以上に類似している点が多いことが指摘できる。

表1 奥行2間の拝所

市町名	神社名	大字	社格	規模	屋根形式	葺材	天井	外廻	軸部	
				間口×奥行						
敦賀市	常宮神社	常宮	県社	1 × 2	唐破風造	銅板葺	前一間:化粧屋根裏 奥一間:格天井	四方吹き放し	角柱	腰長押
小浜市	天満神社	田島	村社	1 × 2	入母屋造	銅板葺	格天井	四方吹き放し(板壁)	角柱	—
	櫻神社	平野	村社	1 × 2	切妻造	銅板葺	化粧屋根裏	四方吹き放し(板壁)	角柱	—
美浜町	織田神社	佐田	郷社	1 × 2	入母屋造	銅板葺	棹縁天井	四方吹き放し	角柱	—
若狭町	宇波西神社	気山	県社	1 × 2	唐破風造	銅板葺	格天井	四方吹き放し(サッシュ)	角柱	—
	多由比神社	田井	村社	1 × 2	唐破風造	銅板葺	格天井	四方吹き放し(サッシュ)	角柱	—

(3) 前身建物（氣比神宮中門）

当社の拝所は、氣比神宮に勤務していた先代が昭和17年に氣比神宮から門を譲り受け、それを拝所として再建したと伝わっている。今回の調査でこの言い伝えを裏付ける棟札（写真2）が見つかった。棟札には「元氣比神宮中門改築之也」、「昭和拾八年拾壹月拾八日竣工之也」とあり、現拝所の前身建物が氣比神宮の中門であること、竣工は昭和18年11月18日であることなどが確認できた。

写真3は氣比神宮中門の絵葉書である。この写真からは正面の様子しかわからないが、向唐門形式や正面柱につく獅子や猿の木鼻、中備の拳鼻付の組物、虹梁上の束や笈形など細部形式はほぼ現常宮神社拝所と同じである。ただし、屋根は桧皮葺とみられ、現拝所の銅板葺とは違っている。

そして、常宮神社拝所の前身が門であったことは痕跡からも確認できる。すなわち、柱はすべて角柱であるが、主柱に相当する桁行中央列の2本は307×270mmの後平材で、柱上には門にみられる後平材の冠木が乗り、しかもこの冠木両端の下端には写真4にあるように、扉の幣軸を受けていた藁座の痕跡が認められる（幣軸穴は埋木されている）。また、屋根は移築時の桧皮葺から銅板葺に変わっているが、屋根形式などに大きな改変跡は認められない。これらのことから、この建物がもとは中央列に扉がつく、四脚門形式の向唐門であったことがわかる。

一方、真願寺所蔵「敦賀十勝」の中の「氣比宮」（『敦賀市史 史料編第二巻』表紙見返り掲載、図2）の図や氣比神宮の「境内古図」

（『重要文化財氣比神宮大鳥居保存修理報告書』掲載、図3）によれば、本殿の正面前方に四脚門形式の向唐門がみられる。唐破風屋根の妻面を正面に向け（向唐門）、正面柱間1間、側面2間の四脚門形式の門である。さらに、前者の図には中央柱間には地覆材も描かれていてここに扉がついていたことをうかがわせる。そしてこの建物の左右に続く回廊の屋根は縦線が描かれ瓦葺とみられるが、この門は本殿の屋根と同じ表現であり、桧皮葺あるいは柿葺とみられる。また、両側面前方の柱間には菱格子を思わせる表現がみられるが、現拝所の同じ位置に中敷居や柱面には杵子状の杵が付いていた痕跡（杵が当たっていた部分だけ風食がない）が認められ、以前は格子か連子窓のような柱間装置が付いていたこともわかる。これらのことは写真3の絵葉書からも確認できる。

そして、安政4年（1774）の「氣比宮境内図」（小宮山安氏所蔵『敦賀市史 史料編第二巻』所収、図4）によると、本殿（図には「本宮」とあり）の正面にあるこの建物は「中門」と記されている。東西に「回廊」がつながる状態も同じであり、これが氣比神宮において中門と呼ばれていたことがわかり、言い伝えとも合致している。



写真2 移築・再建を示す棟札



写真3 氣比神宮中門時の写真



写真4 冠木に残る幣軸・藁座の痕跡

以上のことから、常宮神社の拝所の前身建物は、写真や古図にみられる気比神宮の中門であり、昭和17～18年に譲り受け、拝所として現在に至っていることが確認できる。ちなみに気比神宮は、昭和9年の台風によって、社殿に大きな被害を受けたため本殿や拝殿、中門などは取り壊され、各部材は再建に備えて保管された。その後、本殿や拝殿は再建されたが、中門は再建されず、後にその部材は常宮神社に移された。



図2 「気比宮」
(『敦賀市史 史料編第二巻』表紙見返し掲載)

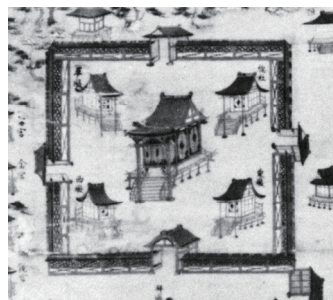


図3 「境内古図」
(『重要文化財気比神宮大鳥居
保存修理報告書』掲載)

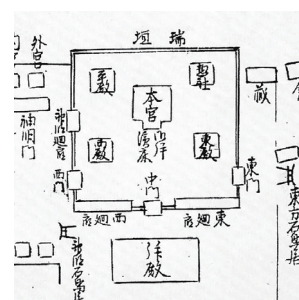


図4 「気比宮境内図」
(小宮山安氏所蔵『敦賀市史
史料編第二巻』所収)

(4) 建築年代

常宮神社拝所に関して、『福井県神社誌』には「酒井忠勝が寄進した寛永14年(1637)当時の気比神宮中門を移築した」とあり、福井県『近世社寺建築調査報告書』では建築様式から建築年代を19世紀初と推定している。

今回の調査において、拝所の建築年代を示す資料は検出されなかったが、柱などの風食状況や虹梁の木鼻や渦や若葉の絵様などの様式からみて、『福井県神社誌』にいう、酒井忠勝が寄進したという寛永期まで遡らせることは無理で、細部形式はそれより遅れ、江戸後期～江戸末期の様相を示している。

そして、『敦賀郡誌』の気比神宮に関する記述に「天保十四年中門を再建」とある。この典拠は定かでないが、現常宮神社拝所の細部様式からみて、当建物の建築年代をこの記述の天保14年(1843)頃と比定しても矛盾しないであろう。

(5) 拝所の建築的価値

常宮神社の拝所は、側面が2間あり、若狭地方の主要な神社にみる一般的な拝所とはやや特異な点も認められるが、唐破風屋根や周囲が吹き放しとなることなど類似点も多い。また、一般的な拝所と比べて、柱や虹梁などは木太く、木鼻彫刻や虹梁絵様など細部形式も繊細で、建築的質は高く、若狭地方における大規模な拝所建築の好例といえる。

そして、この拝所は気比神宮の社殿を構成する中門を昭和17～18年に移築、再建したもので、震災によって焼失した気比神宮に関わる江戸末期の建築遺構としても貴重である。

以上のように常宮神社拝所は県指定文化財の本殿と比べても建築的質に遜色はなく、若狭地方における大規模で、良質の拝所建築として、さらに気比神宮に関わる江戸末期の建築遺構としても貴重である。

3. 常宮神社中門

(1) 建築形式

常宮神社中門は、本殿・拝所の前方、一段低い位置にたつ。正面1間(3.14m)、側面2間(2.65m)、銅板葺で、四脚門形式の向唐門である(写真5)。中央の主柱2本は径280mmの丸柱、前後4本の控柱は220mm角の方柱で、いずれも礎石立。両側面は腰長押をつけ、柱天に頭貫・台輪を回し、その上に出三

斗を載せ、一軒疎垂木の軒を支える。正面と背面は頭貫・台輪の上に拳鼻付の平三斗を2組並べ、上方の虹梁を受け。虹梁上は臺股で化粧棟木を支持、中央の主柱筋は柱天に後平の冠木を渡し、虹梁上に大瓶束をたてて棟木を受けている。前後の頭貫木鼻は禅宗様線形とし、前面には柱内側に獅子頭の彫刻を腕木状に入れて頭貫を支えている。また後方1間は板天井、前方1間は化粧屋根裏天井とする。

(2) 建築年代

福井県『近世社寺調査報告書』には「中門については、宝暦12年(1726)屋根葺替と伝えられており、様式等からみて、本殿と、ほぼ同じ頃の再建ではなかろうか。」とある。

今回の調査においても中門の建築年代を確定するような史料や記録は見つからなかった。しかし、虹梁の胡粉塗りの絵様は簡素で古式を留め、組物の肘木は端部の曲率が大きいこと、前面柱の獅子頭彫刻は精巧で、かつ小振りであることなど、細部形式は江戸時代中ごろの様相を呈している。

これらのことから、中門の建築年代は『近世社寺調査報告書』にいう本殿と同じ頃とみるより若干遅れる可能性もあるが、いずれにしても18世紀前期として間違いないであろう。

なお、軸部の大きさに対して屋根がいくらか大きめであるが、これは当初、桧皮葺(もしくは柿葺)であったものを現況の銅板葺へ葺き替えた際に何らかの改変があったためとみることもできる。

(3) 中門の建築的価値

常宮神社中門は、四脚門形式の向唐門で、虹梁の絵様や組物などの細部に江戸時代中頃の形式を留めている。屋根周りに後世の改変がうかがえ、当初の形態をいくらか崩している点が惜しまれるが、神社にみられる唐門の一事例として貴重である。

特に常宮神社は本殿・拝所とともにこの中門、そして海際にたつ拝殿(これは新しい)が一軸線上に並び立つ特徴的な社殿構成を有しており、その主要社殿のひとつとしても大きな意義を持っている。

本殿や拝所と比較すると、建築的質は若干劣るが、建築単体の評価に留まらず、こうした社殿構成、すなわち複数の建築が造り出す建築群として評価すべきと考える。

4. 結語

以上、敦賀常宮神社の拝所と中門の建築調査結果について報告した。拝所は江戸末期に建立されたとみられる気比神宮の旧中門を昭和17~18年に移築し、拝所として再建されたもので、若狭地方の神社にみられる大規模な拝所建築の一事例として、さらに江戸末期における気比神宮の社殿の現存遺構として貴重な歴史的建築である。一方、中門は銅板葺の向唐門で、江戸中期ころの建立とみられ、福井県内の神社にみられる数少ない唐門の遺構例として貴重である。

そして、正徳3年(1713)造営の本殿の前方に拝所と中門、さらにその前方海際にたつ舞殿の各建物が一軸線上に並び、軸線の先には対岸の気比神宮が位置している。こうした常宮神社の社殿構成も注目される。

◆主な参考文献:

『重要文化財気比神宮大鳥居保存修理工事報告書』(昭和62年)、『敦賀郡誌』(大正4年 昭和61年復刻)、『敦賀市史 通史編 上巻』(昭和60年)、『同 史料編第二巻』(昭和53年)、『同 史料編第三巻』(昭和55年)、『近世社寺建築調査報告書』(昭和56年)、『福井県史 資料編14 建築・絵図・彫刻等』(平成元年)、『福井県神社誌』(平成6年)



写真5 中門

■ 拝所(写真、図)



拝所および本殿



拝所外観



中央柱間上部



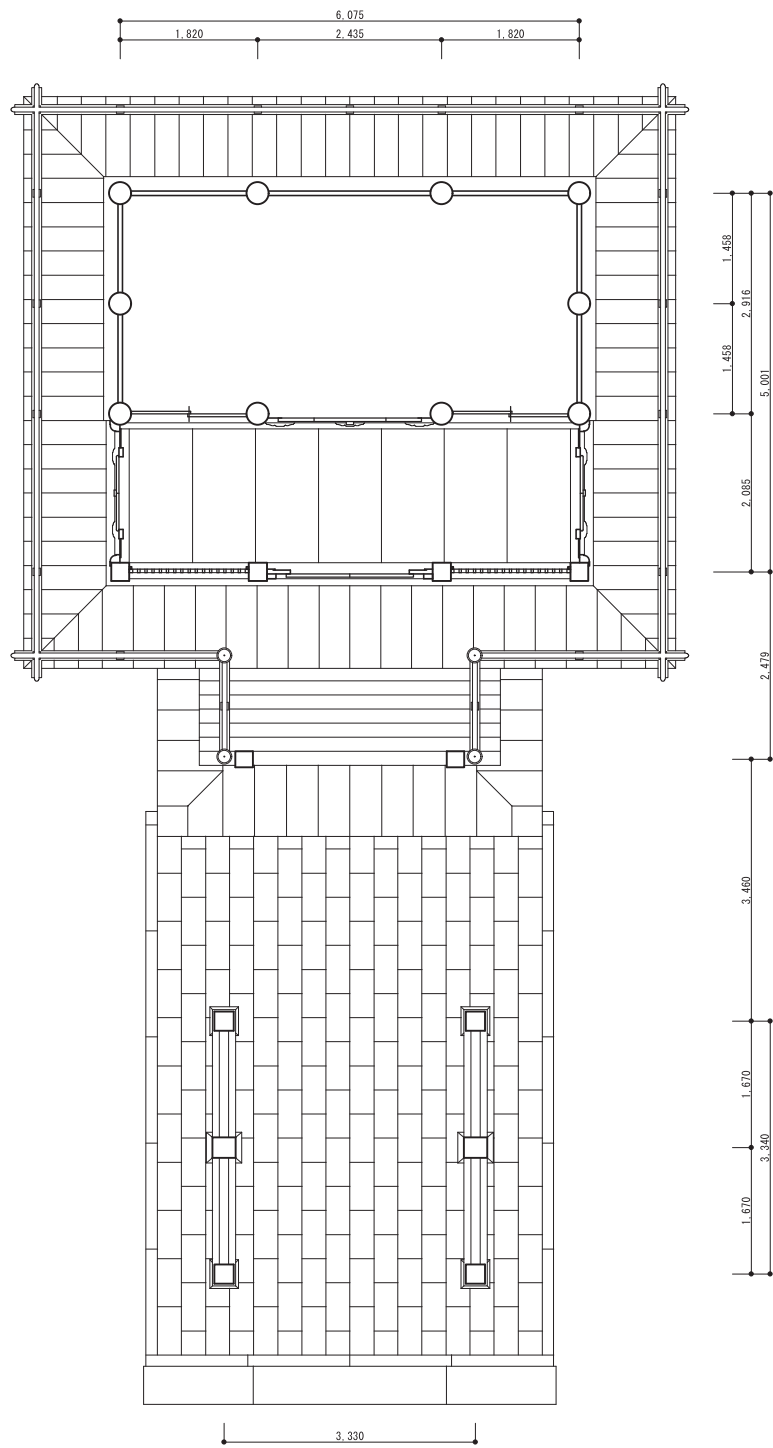
左側面前方柱間上部



右側面前方柱間上部



右側面後方柱間上部



拝所および本殿平面図 1/100

■中門（写真、図）



中門正面



中門背面



扉



正面虹梁上部



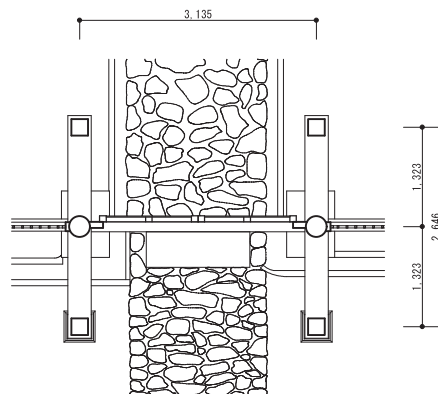
前面上部



前方木鼻（獅子）



後方鼻（縹形）



中門平面図 1/100

(平成 21 年 3 月 31 日受理)